

5月の14日の當麻寺の「お練供養」。夕日に照らされた黄金の仮面の二十五菩薩と、仏となって極楽浄土に赴く中将姫が、本堂と娑婆堂に掛けられた来迎橋を練り歩くさまは、さながら荘厳な仏教絵巻を見るようです。先月の小島さんの雲雀山の記事に誘われて一つの中将姫の物語を書きました。どうでしょう。



天平の昔、奈良が花の都といわれた頃。
 紀の国は雲雀山の山中、深い森の道端に一人の年老いた農夫が休んでいるところへ、姿形の凛々しい一人の若者が通りかかり、農夫に声をかけたのでございます。
 「これ、ものを訊ねる。雲雀山とはこのあたりの山のことが」
 「このあたりは確かに雲雀山に違いないが、お前さまはどちらからお出でかな？」
 「私は都からやってきた。雲雀山に長谷姫様が居られると聞いて訊ねてきたのだ」
 「この辺りは見ての通りの田舎じゃが、姫様が居られるのは都であろう」
 「いや、姫は都に居られたが、仔細があってこの山に逃げて来られたのじゃ」
 「ところで、お前様が手にお持ちなのは何でござる？」
 その時若者は、手に美しい雉を持っていたのでございます。
 「これか、これは先ほどこの先の森で、私が射た雉じゃ」
 「これは良い腕をお持ちじゃ。そういえば、その森の先に小屋があったの。そこに行けば姫様のことが分かるやも知れぬ。それはそうと雉をそのまま手に持って行かれると、熊か狼に横取りされてしまいますぞ。これに入れて行きなされ」
 若者が「これはかたじけない」と言いながら、農夫に渡された袋に雉を入れ、振り返ると、農夫の姿は苔むした石の地蔵に代わっていたのでございます。

さて、こちらは雲雀山山中の長谷姫様の庵。薄暗い板敷きの開け放されたしとみと部戸の下で、姫が写経機に向かい熱心に写経をしておられました。
 と、そこへ先ほどの農夫が大きな籠を背負って入ってくると、
 「姫は相変わらず熱心でござりますな。今は何を写経しておられるのです？」
 「これは行者様、今は『称讚浄土経』を写経しています。このお経は、過日この庵でたそがれの月を見ておりました折、不思議なことにきつねが来て置いていったものでございます。私には難しいお経ですが、阿弥陀様の御心に少しでも近づきたいと、このように日毎写経をしております」
 「姫が以前と違って、穏やかなお顔をしておられるのは阿弥陀様のお陰ですか」
 「また、ここで山の生き物たちと共に暮らしておりますと、本当に穏やかに過ごすことが出来るのです。それで行者様は、此度こたびはどちらへお出かけでしたか」

「此度は唐という国の、そのまた西の崑崙という深い山で修行していたのです」
「まあ、そのような遠いところへ行者様はどのようにして行かれたのですか」
「私は鵬という大きな鳥に乗って行ってきたのです。姫、これはその崑崙の山に成っていた珍しい木の実ですぞ」と言いながら、農夫は背負っていた籠を降ろして姫に見せたのでございます。姫は珍しげに、籠の中の木の実を取ると
「うそでしょう。これは大和の葛城の山にある木の実ではありませんか。行者様は、葛城の山で修行されていたのでしょうか」

「はは、姫はよくご存知じゃ」と農夫は楽しそうに笑い、「しかし、葛城の山からでもその頂きに立てば、阿弥陀の居られる遥か西方の極楽浄土が望めるのです」
「本当ですか。では私を葛城のお山の頂きに連れて行って下されませ」
「それは、無理じゃ。姫の足では葛城の山を歩くのはとても無理じゃ」
「いいえ、私に阿弥陀様の居られる極楽浄土とやらを見せて下されませ」

「はは、わがままな姫だ。では見せてあげましょう。さあ、目をお瞑りなされ」
姫は部屋の中どこかに静かに座ると目を閉じられました。すると紫の雲があたりに満ち、何とも言えない香りが漂い、妙なる音楽が空の上に響き渡り、その雲間から一条の光明がさして、阿弥陀如来を始め多くの仏菩薩が、そのお姿を現されました。姫があまりの不思議さに念仏を唱えるのも忘れ、呆然としていると今度は深い深い井戸の底が見、そこに、一羽の雉が傷ついた身体で、懸命に井戸の底から飛び立とうとしているのが見えたのでございます。

「あの雉^{きじ}は矢に打たれて、今、死に掛けているのです」
「……助けたい。行者様、あの雉を助けて下さいませ」
「では祈りなされ。あの雉のために、姫は懸命に祈りなされ」

姫は懸命に祈られ、暫くして気が付くと、姫の膝の上に先ほど井戸の底で苦しんでいた雉が居たのでございます。姫が立ち上がり、ゆっくりと雉を放たれると、雉は元気に羽ばたいて、西の空目指して、飛んで行ったのでございます。

その日の午後のこと、長谷姫様が庵の庭で畑仕事をしておられると、
「あなたは姉君ではありませんか　？」と、一人の若者が声をかけたのでございます。姫はすぐに若者が腹違いの弟の豊寿丸であることに気付かれましたが、しかし今は世を棄てた身、姫は若者にこのように答えられました。
「いいえ、私はこの山に一人で住んでいるもの。あなたの姉ではありません」
「それはおかしい。この庵に長谷姫と呼ばれる方が居られると聞いて来たのです」
「その長谷姫は、どのようなお方なのでしょう」
「元は都の右京三条にお邸のある藤原南家の姫君だったのですが、仔細があってお邸を出て、雲雀山に逃がれてこられたのです」
「いいえ、逃げてきたものではありません。私は自ら望んで此処に来たのです」
「姉上　！、やはり姉上でしたか。私は姉上を捜しにやってきたのです。母上

が姉上にしたことを、償うためにやってきたのです」

長谷姫は、^{よこはぎのあそん}横佩朝臣と呼ばれる右大臣藤原豊成様と、品沢親王の息女、絶世の美女の紫の上様の娘として、何不自由なく育てられたが、姫が三歳の時、母親の紫の上が亡くなられ、その後、豊成様は照夜の前と再婚されたのでございます。

早くから深い信仰心を持たれた姫の元には、童子の姿になった勢至菩薩が訪れ、仏の道について語っておられたそうでございます。やがて成長した姫を、都の人々は観世音菩薩の生まれ変わりであると噂しました。それほど姫の姿は、高貴な美しさと優しさに満たされていたのでございます。

しかし、長谷姫様のこの評判を、継母の照夜の前は喜ばれなかったのです。豊成様が、自分の子の豊寿丸より長谷姫様を可愛がるのも、彼女を苛立たせ、ついには長谷姫を亡きものにしようと企んだのでございます。

「母上は今病の床に臥せって居られます。母上は姫になされた罪を深く悔やまれて、一目姫にお詫びをしたいと申され、私はこうして姉上を捜しに来たのです」

「私は、家に戻ろうとも戻りたいとも思いません。またお義母様のことも何とも思っておりません。ここに参って、亡くなった私の母上の菩提を弔い、阿弥陀仏様のことを考えておりますと、お義母様の^{よこしま}邪な心が悲しく、気の毒に思えてくるのです。今はお義母様の病が癒える様、阿弥陀様にお祈りいたしましょう」

姫はそう言うと庵に入り、静かに念仏を唱え始めました。すると姫の耳に、亡くなった実母の、紫の上様の声が聞こえてまいりました。

「あなたはまだ幼いけれど、母の末期の言葉をよくお聞きなさい。あなたがまだ生まれる前、私たちは長谷の寺の観音様に子授けの祈願を致したのです。その折、若し子供が授かれれば、誓って殺生はいたしませんとお誓いして、あなたを授けていただけたのです。ところがあなたが3歳の時、父上の豊成様が誓いを忘れて鹿を撃ってしまわれたのです。私はその罪でこうして冥土へ召されることになりました。あなたは成長したら慈悲の心で人に接し、父上が新しく迎える新しいあなたの母を、本当の母と思って大切にしてください」

次に姫の前に美しい観音菩薩が現れ、こう告げました。

「汝の母親が、確かに浄土に往生したことを告げるために、今、私は姿を現したのだ。阿弥陀仏を頼んで一声称念する信力で、罪深い女人でも極楽浄土に往生出来る。これはひとえに弥陀の眼力によるものだ」

姫は静かに涙を流されました。深い悲しみが心を満ち、二人の母親を亡くした悲しみが心を満ち、母親を救えなかった悲しみが、心に満ちたのでございます。

「行者さま、私に大仏様を見せてくだされ、世界を慈悲の光で照らされるという仏さまを見せてくだされ」と姫は、虚空に向かって語りかけられました。

すると、姫の目には大仏ではなく、大仏を造るために働かされている人々の姿や、貧困と過酷な重税にあえぐ人々の姿が見えてきたのでございます。

「これは大仏ではない。早よう、私に花の都に居られる大仏様を見せてくだされ」

「姫これが大仏じゃ。大仏の本当の姿じゃ。都と大仏を造るために苦しんでいる人々の姿じゃ、さあ、姫は彼らのために祈りなされ、姫は彼らの仏になりなされ」

當麻寺に入られた長谷姫様は、称讃浄土教一千巻の書写を思いつかれ、3年余りの後に遂にその大願を果たされました。そして更にその月の16日に本堂に参籠し、年来の大願の成就を願われました。それは、現世において生きながら、阿彌陀如来の極楽世界を拝みたい、というものだったのでございます。

次の日、一人の老尼が姫の願いが仏に通じたと告げられ、こう言われました「百駄の蓮を集めなさい。集めた蓮の茎から糸を紡ぎ、寺の北東に新しい井戸を掘らせて、その糸を洗い染めるのです。その井戸の水は清く澄み切っており、糸は美しく染め上がるでしょう。その糸をかたわらの桜の木に乾しなさい」

姫がそのようにすると、今度は若き織姫が現れ、「糸は美しく染め上がりましたか」と尋ねられました。姫が「はい」と申されますと、

「それでは今夜織りましょう」と言われて、千手堂の傍らに据付けられた織機で、織り初められました。機は軽やかな音を立てて、そこから美しい仏と菩薩が織り上げられて行き、夜も白々と明けようとする頃には、一丈五尺の見事な曼荼羅が織り上がったいたのでございます。

姫が気がつくと、織姫の姿は消え、また元の老尼が現れました。

「あなたの願いは成就しました。この曼荼羅で多くの人が救われるでしょう」

「あなた様はどなたでしょう」

「私は西方浄土の教主阿彌陀如来です。観音菩薩とともにあなたの願いを果たすために参ったのです。私は13年後あなたを迎えにくる。その時あなたは生きながら極楽浄土へ入るのです。それまで勤めて精進しなければなりません」

そして座を立たれると、花が雨のように降り、美しい音楽は空に満ち、光明は四方を照らし、紫雲に乗って老尼は西の空に向かって帰られたのでございます

中将姫物語

當麻寺で売っている「中将姫物語」は奇妙な話で、主人公の父親の豊成だけが実在の人物で、他は全て架空の人物である。(この物語は先月の小島さんの「雲雀山得生寺」の記事に詳しい)。ただし中将姫とされる女子は実在の人物で、豊成の妻の一人の藤原百能の娘ではないかとされる。この百能は藤原四兄弟の末弟・藤原麻呂と、^{ももの}当麻氏の娘の間に生まれた女性で、豊成の死(766年)後も780年まで生存し、内侍として従二位まで昇進した。當麻寺は当麻氏の氏寺。この百能の娘が母親の里の縁で、當麻寺に入り尼となったのであろうか。

何故彼女が尼になったのか分からないが、奈良時代の後半は政争と内乱が相次いだ時代、二上山山麓の静かな里では、都の魑魅魍魎に心を病んだ一人の姫が、人々の救済と供養を祈願して當麻寺に入ったという伝説が、今も語り継がれているのである。